論文

前期赤松氏の展開と禅宗寺院

大村拓生

はじめに

前期赤松氏にとって禅宗寺院が重要な役割を果たしていたことは、これまでも論じてきたところである。[1] ただ個別の指摘にとどまり、その全体像を前期赤松氏の歴史的展開のなかに位置づけるまでには至っていなかった。

いまだ膨大な禅宗史料の全体像を把握することはできていないが、赤松一門の構造についてはある程度見通しを得ることができた。[2] ひょうご歴史研究室赤松氏と山城研究班も活動を終えることになるため、中間総括としてすでに論じたことも含めてその課題に取り組むことにしたい。

一、赤松円心と法雲寺・円応寺

建武三年（一三三六）三月～五月にかけて赤松城（後に白旗城と呼称されることになった経緯については拙稿B参照）に籠城して新田義貞軍を食い止め、足利尊氏の勝利に貢献したことで播磨守護を得た赤松円心は、翌年七月には苔縄の地に一山派の雪村友梅を開山として法雲寺を建立する。

鎌倉末期に渡元僧である雪村を外護していたのは、播磨守護を兼任していた六波羅探題北方の常葉範貞被官の小串範貞で、播磨知足庵で没していることから、播磨守護代だった小串範行とともに、播磨とも関係があったことがわかる。六波羅探題の料所であった佐用荘を出自とする円心もその系

列に位置し、俗名である範村の範もそれに由来しているとされる。[3]

その意味で雪村を開山とする法雲寺の建立は、鎌倉期の小串氏と播磨との関係を、新たに守護となった円心が継承したことを示している。また法雲寺には元弘以来の戦没者を追悼する目的で建立された利生塔が設けられ、これまた円心の挙兵の地である苔縄に相応しいものだといえる。康永元年（一三四二）八月の本尊供養は、「檀越下洛シ、一国馳集リ、諸国群ヲ成テ、万人耳目ヲ驚シ畢[4]」と在京していた円心もわざわざ下国して参列した大規模なものだったことが知られる。

二〇・二一頁の表一は法雲寺に住持などとして在籍した僧を集成したものである。このうち元号年を明記していないものは、本人もしくは詩文作者の死没年など下限に挿入したもので、必ずしも順序を示していない。[5]遺漏も少なくないと思われ、人名も充分に特定できていないが、ある程度の傾向をつかむことはできる。すなわち雪村の後、同門の4聞渓良聡、雪村門弟の8太清宗渭・14雲渓支山など一山派の僧侶だけでなく、楊岐派の5無雲義天・13春谷永蘭、大鑑派の16天境霊致など十方住持の寺院として、さまざまな門派の僧が入寺している。

康暦二年（一三八〇）春には足利将軍と密接な関係を築いたことで最大門派となった夢窓派の24絶海中津が、赤松氏に招請されるなど夢窓派も少なからずみえる。播磨で夢窓派寺院[6]は何れも諸山に列せられた夢窓疎石を開山とする瑞光寺、春屋妙葩を開山とする法幢寺で、何れも東播の多可郡に立地し、創建時には赤松氏との関係は認められない。相互の思惑が一致したことで、入寺にいたったものだろう。

このように法雲寺が播磨最大の禅院になる一方で、近世になってから編まれた『延宝伝燈録』によると、円心がもともと開山に招いたのは円応寺開山となる聖一派の大卜玄素で、大卜がそれを雪村に譲ったとある。雪村側の伝記史料にはみられず、そのまま信じることはできないが、鎌倉後期に播磨へ最初に浸透したのが聖一派であることを考えると、[7]円心と大卜の関係が鎌倉期に遡る可能性は充分にあり得ることだろう。円応寺創建は暦

応初年とされ、法雲寺建立時点では予定されていたと思われる。

一九頁の表二は円応寺に在籍した僧を表一と同様の基準で集成したもので、後に十方住持の諸山に位置づけられ一山派の入寺もみられるようになるが、初期は聖一派で占められていた。その点で円心段階での禅僧との関係は複数の門派に及んでいたことになる。

二、赤松則祐と宝林寺・一山派寺院

円心は貞和六年（一三五〇）正月に京で亡くなり、すでに摂津守護になっていた嫡子範資がその地位を継承するが、同年一〇月には足利尊氏・直義兄弟が決裂して観応の擾乱が勃発し、範資も翌年四月に病没する。範資嫡子は光範だったが、円心庶子の則祐が七月に播磨で南朝皇子赤松宮を擁立して挙兵し、一一月には尊氏と南朝の講和を仲介して頭角を現していく。

これは光範が一時的に直義派に属し、尊氏派に属した次兄貞範が在京していたのに対し、則祐はそれ以前から播磨に在国していたことで、播磨武士の編制で優位に立てたためと考えられる。尊氏嫡子の義詮が文和四年（一三五五）二月に南朝方山名氏に勝利した摂津神南合戦への則祐の貢献は、それを決定づけるものとなった。[8]

則祐が雪村友梅を開山として備前国新田荘に建立した宝林寺について、焼失した後に赤松の地に再建されたのが文和四年春とされるのは、それを象徴するものである。さらに延文二年（一三五七）一一月に則祐と雪村法嗣の大同啓初の連名で定められた宝林寺規式には、[9]則祐の家嫡が「檀那」として管領し、雪村門徒を興行するよう定め、円心と雪村との関係を則祐が継承することを宣言している。一八頁の表三に示したように宝林寺歴代は不明なものを除いて一山派に独占されており、同じ十刹でも十方住持の法雲寺とは異なっていた。

さらに一山派の僧侶と関わりをもつ寺院が西播磨各地に建立されたことも注目される。すでに拙稿Aで全体を整理し、一九頁の一山派法系図にも関係寺院を書き込んである（大まかな位置は二二頁の地図に示した）。その詳細な事情がわかるの

が大義寺で、延文元年に則祐が蘭州良芳を招き、「上岡郷内北山幷荒野」に伽藍が営まれたものである。[10] 上岡郷主の北野氏は当初は新田義貞に属し、蘭州を頼ることで赦免され、「赤松一家安全」を祈願して大義寺と金剛寺が蘭州の門葉の寺院として建立されたという。

どこまで事実といえるは定かではないが、北野氏の赤松氏への従属の過程で、一山派寺院の建立が重要な意味を有していたことは間違いなかろう。蘭州が春王（後の足利義満）を北野義綱に託して播磨に避難させた功績で、偏諱を受け改姓した喜多野氏は室町期には在京奉行人として活動する。しかしこの段階では在国して独自の基盤を有しており、赤松則祐とは単なる主従関係だけでなく、一山派の門流を通じたつながりをも有していたのである。

正庵良因とかかわる連城寺が、石見守護代家と関わっていることとあわせて、来歴の不明な寺院についても、則祐と播磨武士との紐帯を強める役割を果たしていたものと思われる。とりわけ南朝勢力である山名氏と城山城・白旗城を構築して対峙し、長期の戦時体制を強いられていた則祐にとって、寺院の建立はそれを側面から支える効果が期待されていたのではないか。

三、赤松義則の家督継承と一門

貞治三年（一三六四）八月、赤松貞範の有していた美作守護が山名時義に引き渡されることで山名氏が幕府に帰順し、その代替措置か則祐は備前守護を得て、翌年五月に上洛する。[11] この年に「赤松守護屋形」が初めて見え在国拠点の整備を行われていたが、貞治六年九月には「守護在京之間、国中事無其隠」「守護所属国人等多在京」と、[12] 則祐本人のみならず、国人のなかにも在京するものが多くあったらしい。そして応安四年（一三七一）一一月二九日に則祐は京都で没し、直前に上洛した一四歳の義則が家督を継承する。

しかし「当守護幼ちの間、于今遅引無沙汰」[13] とあるように状況は混乱したらしく、則祐室の七条大方が後家として口入し、赤松光範や赤松貞範後継の顕則などの行動も活発化した。[14] 義則の誕生は

則祐の家督継承が確実になった後で、宝林寺・赤松五社宮など嫡流工作をおこなったものの[15]、義則がすんなりと継承できなかったのである。

そもそも則祐時代から法雲寺では光範が上位に扱われていたことは拙稿Dで指摘し、表一で法雲寺住持を推挙している43・45・46赤松阿波は七条流の満弘に比定することができる。61も赤松政則が死去して、七条流から義村が迎えられた時期で名目的には義村とみなすことができる。

この七条流と禅宗との関係については、昨年に片岡秀樹氏により専論が公刊された[16]。赤松範資が摂津守護を得た建武四年（一三三七）に渡来僧の明極楚俊を勧請開山、その弟子で後に法雲寺住持も歴任した竺堂円瞿を開山として、兵庫津を臨む摂津福原に兵庫の律宗寺院である中福寺を改めて広厳寺を建立した。さらに範資は竺堂を開山に尼崎に栖賢寺を創建し、佐用荘広岡の天沢寺にも関わったという。

氏が範資を妾腹の長子の根拠とする『翰林葫蘆集』所収の詩文は則祐の嫡流工作の影響を受けている可能性があり、光範の子息を満弘とするのも年齢差がありすぎて承伏しがたい。しかし拙稿Bで漢詩文の理解が不十分だった広岡にあった寺院の特定など、七条流と禅宗との関係が詳論された重要な研究で、則祐流とは別個の禅宗とのコネクションが維持されていたことが明確になった。

さらに片岡氏は根拠は明示していないが、赤松貞範と関わりを有する赤松の栖雲寺[17]も、兄範資の影響を受けての明極の開山だとする。広厳寺と同時期に栖雲寺が建立されたとは考えにくいが、永和戊午仲夏（一三七八）の年紀を有する梵鐘には「栖雲寺住持淂珉」とある[18]。特定できないが「淂」は明極の燄慧派がよく用いる系字であり、建武三年に没した明極を勧請開山とした可能性はある。

なお貞範は永和二年（一三七六）が終見史料で、梵鐘の造立年は貞範の没年の可能性がある。栖雲寺の建立について拙稿Aでは円心子孫としての結集がはかられたと評価したが、むしろ一山派とは異なる門流が選択されたことをもって独自性を強調したとみるべきかもしれない。建立年が則祐の存生時ならなおのこと、死没後なら統制の弛緩ということになる。表二に示した円応寺の住持を推

挙している8赤松伊豆守も貞範を祖とする春日部流の貞村で、円心から貞範が円応寺の檀越としての地位を継承したとみられる。

則祐の宝林寺建立と一山派への肩入れも、範資の七条流が円心建立の法雲寺を、貞範の春日部流が円応寺を継承していたため、独自性を担保するために止むなく採った手段ともいえなくもない。円心遺領の多くも範資・貞範に配分されたと考えられ、則祐独自の基盤が乏しい中で、それを有効活用したのだろう。

また義則も円心創建の建仁寺大龍庵ではなく、雪村法嗣の太清宗謂の塔頭で則祐らの先祖仏事を営んだことが明らかにされており[19]、これも独自性の強調だろう。義則が聖一派の一源会統と方外の交を結んだとされるのも[20]、影響力を広げるという意図があったのかもしれない。

もっとも播磨・備前の守護という地位は他の一門から卓越するもので、義則は嘉慶元年（一三八七）一一月からは官途が兵部少輔から上総介にかわり[21]、翌年には侍所所司という幕閣の要職の活動徴証もある[22]。そして拙稿Cに詳述したように、一一月一七日には義則本人が下向して宝林寺供養が行われており、則祐―義則という系譜の正統性を大々的にアピールする場となったと思われる。明徳の乱で山名氏が敗れると、翌明徳三年（一三九二）から義則は美作守護も得ており、その地位を確固たるものとした。

たしかに一門は在京活動を行っており、明徳三年八月二八日の相国寺供養では、随兵として義則弟の義祐・時則が、帯刀として同じく満則、光範庶子の在田則康・葉山則春・永良則綱、春日部流の頼則・則貞の名がみえる（『迎陽記』）。則は則祐の偏諱で、七条流嫡流以外はそれを受けているようにみえる。また永良則綱の名字の地である永良荘に立地する護聖寺に雪村法嗣の雲渓支山が入寺していることを拙稿Eで触れたように、惣領の影響下におかれていたことは確認しておきたい。

四、在国勢力と一山派

さて則祐が在京して以後は、守護当主、奉行人、円心以来の赤松一門、侍所所司代を独占した浦上

氏は在京が基本だったと考えられる。

一方、東寺領矢野荘関係文書を通覧すると、応永元年（一三九四）一二月から、坂本の小河氏が守護役の賦課主体として登場し、代官は何か問題があれば坂本に出向き、坂本および守護代所（当初の広瀬の宇野氏から応永五年ごろを境に石見の赤松下野守家に変化）からの賦課がみられるようになる。小河氏は国衙眼代職に任じられていることから、かつては国衙機能の継承者と認識されていたが、近年の研究を総合すると守護請された国衙領の代官職とみるべきだろう。[23] 前述したように則祐流の直轄領はそれほど多くなかったと思われ、守護役と合わせて播磨守護としての収益を管轄していたものと思われる。

小河氏、守護代は拙稿Ａで取りあげた正月儀礼の実施を鑑みると、特別な軍事動員がない限り在国していたようにみえる。こうした在京と在国の明確な区別が赤松氏の特徴で、戦国期の「赤松家風条々事」にある「御一家衆」と「御一族衆」という家格にもつながるものである。

そうしたなかで注目されるのが、一山派の太白真玄の語録である。[24] 太白は表一に示したように応永一三年（一四〇六）六月に法雲寺住持に任じられ、翌一四年三月晦日に前第一座の環中連首座の秉炬に、四月六日の一七日忌に拈香を捧げている。そして八月一日には、「徳王精舎」で行われた「大日本国播州路都多荘居住菩薩戒弟子孝男源則頼」の母である明順禅尼の小祥忌で、陞座拈香を捧げている。

則頼については他の史料で確認することはできないが、永和元年（一三七五）の矢野荘に関する一連の文書により、[25] 当時の播磨守護代が宇野備前権守祐頼であったことが判明する。その確実な終見は永徳四年（一三八四）で、[26] 明徳四年（一三九三）段階で在京していると思われる宇野遠江入道源長状が「西八郡守護代宇野四郎方」に宛てられている。[27] 宇野入道源長は応永三年（一三九六）段階で神東郡の田原荘代官としてみえるが、[28] 矢野荘関係史料で守護代・広瀬とあるのは宇野四郎で、それを則頼に比定することができよう。恐らく父子で何れも則祐の偏諱を受けたものと思われる。この段階で守護代は石見の赤松下野入道に交代し

ていたが、広瀬の宇野則頼もなお健在で、太白を招請できたことがわかる。

仏事が営まれたのは、宍粟市山崎町中野の現在は真言宗寺院になっている徳王寺で、天文一〇年（一五四一）の開基と伝承されている。[29] ただし応安三年（一三七〇）に播州宍粟郡都多村徳王寺の住持範翁・性縁庵主・心悟侍者が、熊野本宮の檀那となっている。[30] 熊野信仰から真言宗というのは無理のない流れで、禅宗との関係は定かではないが、則頼が庇護していたため、太白もその招請に応じたものだろう。

さらに太白は、八月四日には法雲寺で宝林寺都聞だった石虎白公の一七日忌に拈香を捧げ、翌応永一五年四月六日に、赤松義則嫡夫人源氏による正覚山金剛寿院への釈迦像の安座供養を行っている。書写円教寺には徳治三年（一三〇八）に没した東福寺月船のために、弟子の了果が大勧進として建立した塔頭正覚院があったという。[31] 東福寺聖一派ということになるが、了果は神岡金剛寺開山の仙光御房だとされ、前述したように金剛寺開山は雪村法嗣の蘭州良芳である。了果の後に蘭州が入ったのだろうが、ここでの金剛寿院もそのあたりと関係しているのではないか。

続いて太白は、年月日未詳で宝林寺関係者と思われる「大照弟子・少林孫」だという在庵禅門に拈香を捧げているが、前述の石虎も含め法系図では確認できない。太白は宝林寺住持に転じていたようで、応永一六年六月二六日に、万松山東禅寺開山である天琢玄球の三十三年忌に陞座を捧げている。東禅寺の詳細は不明だが、天琢は円応寺開山の大朴の法弟で自身も住持も務めたことが法語からわかる。東禅寺現住持として見える聖選等の詳細は不明だが、聖一派で相承されたと思われる。太白は聖一派関係者の仏事にも関与していたのである。

語録の掲載順はその後になるが、同年五月六日に、「本貫播磨国飾東郡龍峯山興禅精舎」で「賀州太守・摂備州刺史事、奉菩薩戒弟子小寺藤性応」の亡父である「故但州太守大興法公大禅定門三十三周忌」の陞座に拈香を捧げている。「赤松小寺入道性応」は応永二五年に一時的に伏見宮貞成親王に飾万津別符の代官職を望み認められており、[32]

備前守護代とされる。[33] 応永二三年八月一三日付で大山崎神人の備前での荏胡麻商売への違乱停止を命じた赤松義則の遵行状[34]は、小寺伊賀入道に宛てられており、賀州は伊賀を指すことがわかる。備州刺史は守護代のことだろうが、法語によると摂津・備前両国で武功があったとされる。

後期赤松氏段階では、御着段銭奉行などとして多数の文書に登場する小寺氏だが、前期赤松氏段階の徴証は非常に少ない。応永以前となると前述の明徳三年相国寺供養で、赤松義祐の郎党として小寺次郎左衛門尉則職が見えるのみで、これが性応の可能性があるが確証がない。姫路山城歴代[35]でも但馬守を官途とするものはなく、嘉吉の乱時の伊賀守職治も性応とは対応しないため、貴重な史料となる。

興禅寺は姫路市東山に黄檗宗寺院が現存しており、禅宗の後継寺院としてふさわしい。御着とも遠くなく、小寺氏が室町期から飾東郡を拠点としていたことがわかる。応永三四年に赤松満祐が家督を認められず播磨に下向した際に、国からの注進で「備前守護代小寺幷小川等」は降参したとされ[36]、播磨在国が基本だったことが知られる。

太白の播磨での活動が知られるのはここまでだが、法雲寺・宝林寺住持の任中に、聖一派など他門流の仏事にも参列するとともに、広瀬宇野氏・飾東郡小寺氏のような有力な在国勢力の招請にも応じていたことがわかる。

さらに後期赤松氏の復活するとそのなかで勢力をふるった浦上則宗の祖父美作入道は、美作篠向城の大敵を破って凱旋した際に、保寿寺に本尊を安置し当家鎮護の仏にしたという。[37] この保寿寺について雪村派で法雲寺住持の拙叟が石見の連城寺とともに祖塔としていたともある。[38] 拙叟の素性がはっきりしないが、大徳寺開山の宗峰妙超を一族から輩出した浦上氏も一山派と関係していたことがわかる。[39]

このような一山派の僧の活動を軸とした関係は、門流・在国など分裂的要素をはらんだ諸勢力を結びつける役割を果たしていたといえよう。

五、赤松満祐と嘉吉の乱

その一方で赤松氏は分裂的状況を克服して、守護支配の強化を図っていったように見える。

拙稿Aでみたように、応永二九年（一四二二）に守護代は石見から広瀬宇野氏に突如交代する。交代と並行して守護から守護代への遵行状が少なくなり、幕府からの遵行命令も守護から在国奉行人宛になされるようになるとともに、在京奉行人の発給文書も奉書形式から直状形式に変化し、支配機構内の地位を上昇させていったという。[40]

この転換を推し進めたのは、六五歳になっていた当主義則というより、応永一八年にはすでに侍所頭人としてみえる赤松満祐と考えるのが妥当だろう。その一方で石見守護代家の動静は全くわからなくなり、応仁の乱時に突如赤松下野守政秀が登場し、播磨制圧を図りそのまま龍野赤松氏へとつながっていく。石見龍源寺を保護していることからその末裔と考えられるが、[41] 嘉吉の乱時の動静すら語られない。[42] 前述した応永三四年の満祐下国の際に、備前守護代小寺性応、坂本の小河玄助があっさり降参したと伝えられるのも、何らかの不協和音があったからかもしれない。

この満祐下向時の兵粮米徴発と、正長元年（一四二八）八月に始まる正長の土一揆に触発され、同年一一月には播磨でも土一揆が発生する。その中で小河玄助は独断で徳政令を発布したため罷免され、赤松氏被官の櫛橋豊後入道伊高・浦上備前入道珪寿が在国奉行としてあらわれ、櫛橋伊高が小河の眼代を担った。永享四年（一四三二）には櫛橋・浦上に代わり、小河玄助が復帰するが、在京奉行人の筆頭格であった上原対馬入道性智の一族とされる上原備中守のペアとなり、永享九年には浦上三郎が国の検断奉行として登場する。[43]

先行研究はこれを在国支配の強化ととらえ、それ自体は首肯できるものである。しかし嘉吉の乱に加わったのが満祐兄弟のみで、籠城戦すらままならず敗北し、広瀬守護代宇野満貴もあっさり降参したことをみると、[44] むしろ一門・在国勢力間の亀裂を深めた結果ともいえるのではないか。

むすびにかえて

前期赤松氏の展開を禅宗寺院との関係から概観してきた。円心を檀越とする一山派雪村友梅を開山とし十方住持の法雲寺と、鎌倉後期から播磨で活動していた聖一派の円応寺。則祐による家督継承と雪村門流を保護した宝林寺、赤松氏と主従関係を結んだ階層による一山派寺院の建立。義則の家督継承の一方で、法雲寺を庇護する七条流、円応寺を庇護する春日部流の存在。在国と在京、諸門流など分裂的要素とそれを調和する禅僧の行動。在国支配の強化をはかる赤松満祐と矛盾の拡大の帰結としての嘉吉の乱ということになる。

このように禅宗寺院そのものが、一門の分裂と家中の統合に両側面で結節点にあったことがわかる。さて嘉吉の乱で義教殺害後に兄満祐とともに下国した赤松義雅の七歳の息時勝は行方不明となるが、二〇歳だった建仁寺僧の天隠龍沢が探し出して播磨に送り届ける。しかしすぐに敵軍が迫り、交流のある細川持賢を頼るよう伝え義雅は切腹する。持賢は出家させる必要はないと天隠に指示し、建仁寺で僧侶に交じって時勝は保護されることになった[45]。後に天隠自身が記したもので、時勝の息が赤松氏を再興する政則になる。赤松氏が播磨を回復すると天隠は一門・家臣の求めに応じて仏事に拈香を捧げ、前期赤松氏と後期赤松氏をつなぐ貴重な史料として用いられている。

しかしあくまでこれらはその時点での立場を正当化するものであり、それぞれの嘉吉の乱に関する叙述にもかなりの濃淡がある。太白真玄と同じく統合の役割を果たしたものとして、慎重に読み解かなければならない。禅宗史料の陥穽を改めて再確認して稿を閉じたい。

（1）拙稿A「揖保川流域の禅院と石見守護代所」（『ひょうご歴史研究室紀要』二、二〇一七年）、B「赤松氏の拠点形成―白旗城・法雲寺・宝林寺」（『大手前大学史学研究所紀要』一二、二〇一七年）、C「在京守護期の赤松地区と禅院の諸相」（『ひょうご歴史研究室紀要』三、二〇一八年）。

（2）拙稿D「南北朝期赤松一族の動向と赤松地区」（『ひょうご歴史研究室紀要』五、二〇二〇年）、E

「室町期赤松一門の構造」（『同』七、二〇二二年）。
（3）依藤保「赤松円心試論〜悪党的商人像見直しのためのノート〜」（『歴史と神戸』二二四、二〇〇一年）、市沢哲「一四世紀の内乱と赤松氏の台頭」（『大手前大学史学研究所紀要』一二、二〇一七年）。
（4）「峯相記」（『兵庫県史史料編』中世四、寺社縁起類播磨国一）。
（5）玉村竹二編『五山文学新集』の解説、同編『五山禅林宗派図』（思文閣出版、一九八五年）・『五山禅僧伝記集成新装版』（思文閣出版、二〇〇三年）を参照した。
（6）『扶桑五山記』。
（7）原田正俊「播磨国における禅宗の発展」（『日本中世の禅宗と社会』吉川弘文館、一九九八年）。
（8）以上、前田徹「観応の擾乱と赤松則祐」（『中世後期播磨の国人と赤松氏』清文堂、二〇二一年、初出は二〇一二年）、拙稿B・D参照。
（9）『兵庫県史史料編』中世三、宝林寺文書一。
（10）「弘宗定智禅師語録」（『続群書類従』九下）・「喜多野天用性公居士三十三年拈香」（「翠竹真如集」二『五山文学新集』五）。
（11）『師守記』貞治四年五月一八日条。
（12）「学衆評定引付」貞治五年九月一八日条（『相生市史』七、引付集二九）。
（13）応永四年四月日「播磨国酒見寺雑掌申状案」（『兵庫県史史料編』中世七、醍醐寺文書七四）。
（14）拙稿D。則祐室については、熱田公「播磨国矢野荘と『守護所縁女性』たち」（『塵界』九、兵庫県立歴史博物館、一九九七年）も参照。
（15）拙稿A。則祐が意図的に子息を儲けていなかったと、前田前掲論文は指摘している。
（16）片岡秀樹「七条赤松氏と禅宗〜摂津の広厳寺と栖賢寺〜」（『歴史と神戸』六一〜三、二〇二三年）。
（17）上郡町教育委員会によって確認調査が実施されており、島田拓「上郡町域の赤松氏関連遺跡の調査成果」（『ひょうご歴史研究室紀要』二、二〇一七年）にまとめられている。
（18）香取忠彦「東京国立博物館の二口の梵鐘を中心として〜資料紹介〜」（『MUSEUM』二二一、一九六九年）。兵庫県立歴史博物館『赤松円心・則祐』（二〇一二年）資料・作品解説一二九。
（19）山田徹「大名家の追善仏事と禅宗寺院」（早島大祐編『中近世武家菩提寺の研究』小さ子社、二〇一九年）。
（20）前掲『五山禅僧伝記集成新装版』。
（21）初見は、嘉慶元年一一月七日「室町幕府御教書案」（『相生市史』八下、九二一〜三、東寺百合文書ユ六八）。
（22）今谷明「増訂　室町幕府侍所頭人並山城守護補任沿革考証考」（『守護領国支配機構の研究』法政大学出版局、一九八六年）に依ると、嘉慶二年四月一〇日の発給文書があり、同年八月一七日には土岐満貞

に移ったようだが、その翌年の康応元年五月一日に再び義則がみえる。

(23) 市沢哲「伏見宮家の経営と播磨国国衙領〜『徴古雑抄』所収『播磨国国衙領目録』の研究」(『中世公家政治史の研究』校倉書房、二〇一一年)・馬田綾子「赤松氏の領国支配と国衙〜『国衙眼代』小河氏をめぐって〜」(『大手前大学史学研究所紀要』一二、二〇一七年)。

(24) 内閣文庫一九三〜〇四六四「太白和尚語録」。

(25) 「人夫役文書案」(『相生市史』八上、三八〇〜一〜七、東寺百合文書ょ六〇)。

(26) 『相生市史』八上、四三八〜一六。東寺百合文書ウ五七。

(27) 「二十一口方評定引付」応永元年正月二四日条(『相生市史』七、引付集五五)。

(28) 応永三年四月日「九条経教遺誡」(『九条家文書』)。

(29) 中野村(日本歴史地名大系ジャパナレッジ版)。

(30) 応安三年八月七日「播磨国宍粟郡徳王寺檀那願文」(『兵庫県史史料編』中世七、熊野本宮大社文書五)。

(31) 「捃拾集」(『兵庫県史史料編』中世四、寺社縁起類播磨国六)。

(32) 『看聞日記』応永二五年四月五日・五月二六日条。

(33) 「飾磨津別符由来書」(『鹿王院文書の研究』三八四)。

(34) 離宮八幡宮文書九三(『大山崎町史史料編』)。

(35) 大村・小林基伸「『赤松家播備作城記』〜解説と翻刻〜」(『ひょうご歴史研究室紀要』二、二〇一七年)。

(36) 『満済准后日記』応永三四年一〇月二九日条。

(37) 『蔭涼軒日録』長享二年正月一三日条。

(38) 「黙雲集」(『五山文学新集』五)。

(39) 浦上氏の最新研究として、畑和良「浦上氏の歴史」(『浦上家の歴史』浦上家史編纂委員会、二〇二一年)がある。

(40) 三宅克広「播磨守護赤松氏奉行人の機能に関する一考察」(『古文書研究』二八、一九八七年)・「守護奉行人奉書に関する基礎的考察」(『法政史学』四〇、一九八八年)。西面亜希子「播磨守護赤松氏の支配機構〜嘉吉の乱以前を中心に〜」(『神女大史学』二二、二〇〇五年)。

(41) 「龍源寺文渓禅師像賛」(「翠竹真如集」二、『五山文学新集』五)。

(42) 「赤松野州政秀公寿像賛」(同前)。

(43) 伊藤邦彦「播磨守護赤松氏の〈領国〉支配」(『鎌倉幕府守護の基礎的研究【論考編】』岩田書院、二〇一〇年、初出は一九七三年)・川岡勉「赤松氏の分国支配と播磨土一揆」(矢田俊文編『戦国期の権力と文書』高志書院、二〇〇四年)・前掲西面論文。

(44) 『建内記』嘉吉元年九月二六日条。

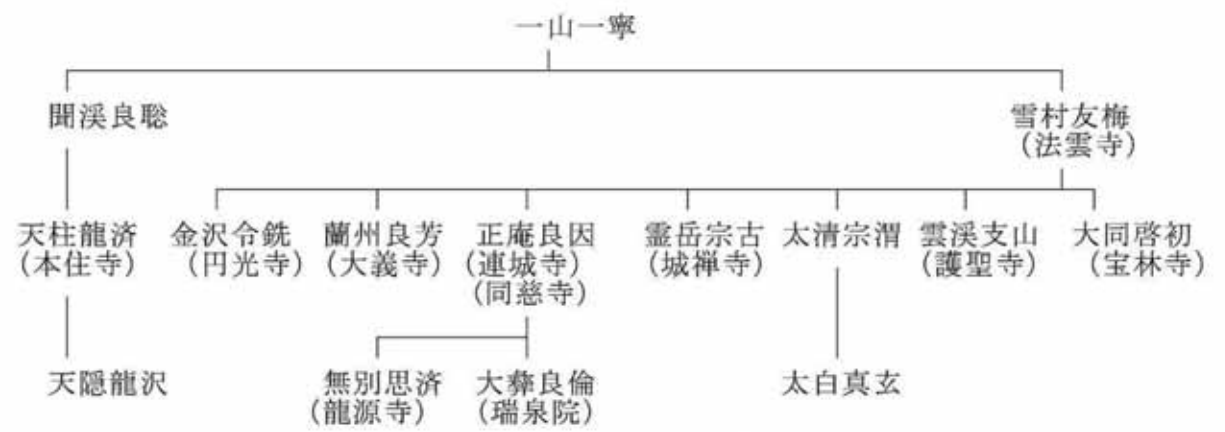
(45) 「慶徳院勝岳尊公大禅定門廿五年忌拈香」(「黙雲稿(異本)」、『五山文学新集』五)。

表３　宝林寺歴代

	人名	門流	元号年	西暦年	備考	出典
1	大同啓初	一山派	延文2	13571100	定文	宝林寺文書1
2	正庵良因	一山派		13650506	頌軸跋	璵東陵日本録（新別2）
3	金仙□選	一山派	戊申夏	13680400	帰	空華集（全2）
4	大同啓初	一山派	戊申夏	13680400	遷	空華集（全2）
5	竺芳祖裔	一山派	応安3	13700809		空華集（全2）
6	太清宗渭	一山派	応安5	13720411	住持	本朝高僧伝35（全書103）
7	雲耕令翟	一山派	至徳2	13850206		空華日用工夫略集
8	雲渓支山	一山派		13859999	前席法雲寺	業鏡台（全3）
9	大春西堂			13859999	前席慈寿	業鏡台（全3）
10	竺芳祖裔	一山派		13910619		投贈和答等諸詩小序（全3）
11	石虎白公		応永14	14070804	都聞、一七日忌	太白和尚語録（内閣）
12	明古徳岩			14090359	曇仲没	曇仲遺藁（新1）
13	太白真玄	一山派	応永16	14090626	住持	太白和尚語録（内閣）
14	大有有諸	一山派				延宝伝燈録22（全書108）
15	月海上人			14130815		懶室漫稿（全3）
16	妙用中			14150822		峨眉鴉臭集（全3）
17	雲耕令翟	一山派		14150822		峨眉鴉臭集（全3）
18	魯山良周	一山派				延宝伝燈録22（全書108）
19	大春良耆			14320405	前住	雪村大和尚行道記（新3）
20	法鈍西堂		永享7	14350803	西洞院殿吹嘘	蔭涼軒日録
21	仙心令竺	一山派		14370420	諸山疏	惟肖厳禅師疏〈新2）
22	妙用中			14370420	諸山疏	惟肖厳禅師疏〈新2）
23	伯文仲	一山派		14370420	諸山疏	惟肖厳禅師疏〈新2）
24	建春峡			14370420	諸山疏	惟肖厳禅師疏〈新2）
25	南谷昊首座			14370420	諸山疏	惟肖厳禅師疏〈新2）
26	宗佐西堂		永享9	14370806	新命	蔭涼軒日録
27	宗璘西堂		永享11	14390805	赤松吹嘘状	蔭涼軒日録
28	済川□舟	一山派		14470000	住	心田播禅師疏（新別1）
29	祖庵			14550000	疏	漁庵小藁（新6）
30	善永西堂		長禄2	14580914		蔭涼軒日録
31	春芳良藤	一山派	長禄4	14600917	公文御判	蔭涼軒日録
32	宗祐西堂	一山派	寛正4	14630328	公文御判	蔭涼軒日録
33	祖林西堂		寛正5	14641121	御判	蔭涼軒日録
34	藤首座		文正1	14660236	宝渚庵塔主	蔭涼軒日録
35	音蔵主		長享2	14880825	下国	蔭涼軒日録
36	韶蔵主		延徳2	14901124		政覚大僧正記（大史8-39）
37	春庵禅師			15000923	前住	翠竹真如集2（新5）
38	茂叔□森	一山派		15000923	前、住光明寺	翠竹真如集2（新5）
39	東明宗晰	一山派	永正5	15080000		五山禅僧伝記集成
40	春荘宗椿	一山派	永正5	15080000	公帖	幻雲文集（続13上）
41	松裔雅蔵	一山派		15219999	寓居	梅渓稿（続13下）

表２　円応寺歴代

	人名	門流	元号年	西暦年	事項	出典
1	大朴玄素	聖一派	暦応	13380826	開山、円心帰依	延宝伝燈録13（全書108）
2	天琢玄球	聖一派		13770626		太白和尚語録（内閣）
3	性天由公	聖一派		13880400	諸山疏	惟肖厳禅師疏（新2）
4	金峰明昶	聖一派	応永3	13960310	住持職	日本歴史389
5	円智悟空			14130815	拈香	懶室漫稿（全3）
6	秀実庵			14370420	山門疏	惟肖厳禅師疏（新2）
7	宗甚首座		永享9	14371208	新命	蔭涼軒日録
8	等縦首座		永享10	14381110	赤松伊豆守之吹嘘	蔭涼軒日録
9	菊堂磵英	幻住派		14400000		村庵藁下（新2）
10	景雲宗瀉	聖一派	文安4	14470819	上京師、寓相国寺	臥雲日軒録
11	宝洲宗衆	一山派	宝徳3	14510000	帖命	翠竹真如集2（新5）
12	啓宗掌祖	一山派		14550000	疏	漁庵小藁（新6）
13	中後首座		長禄3	14590422		蔭涼軒日録
14	周齢首座		寛正3	14621220	公文御判	蔭涼軒日録
15	遠湖宗樹	一山派	長享1	14870812	坐公文	蔭涼軒日録



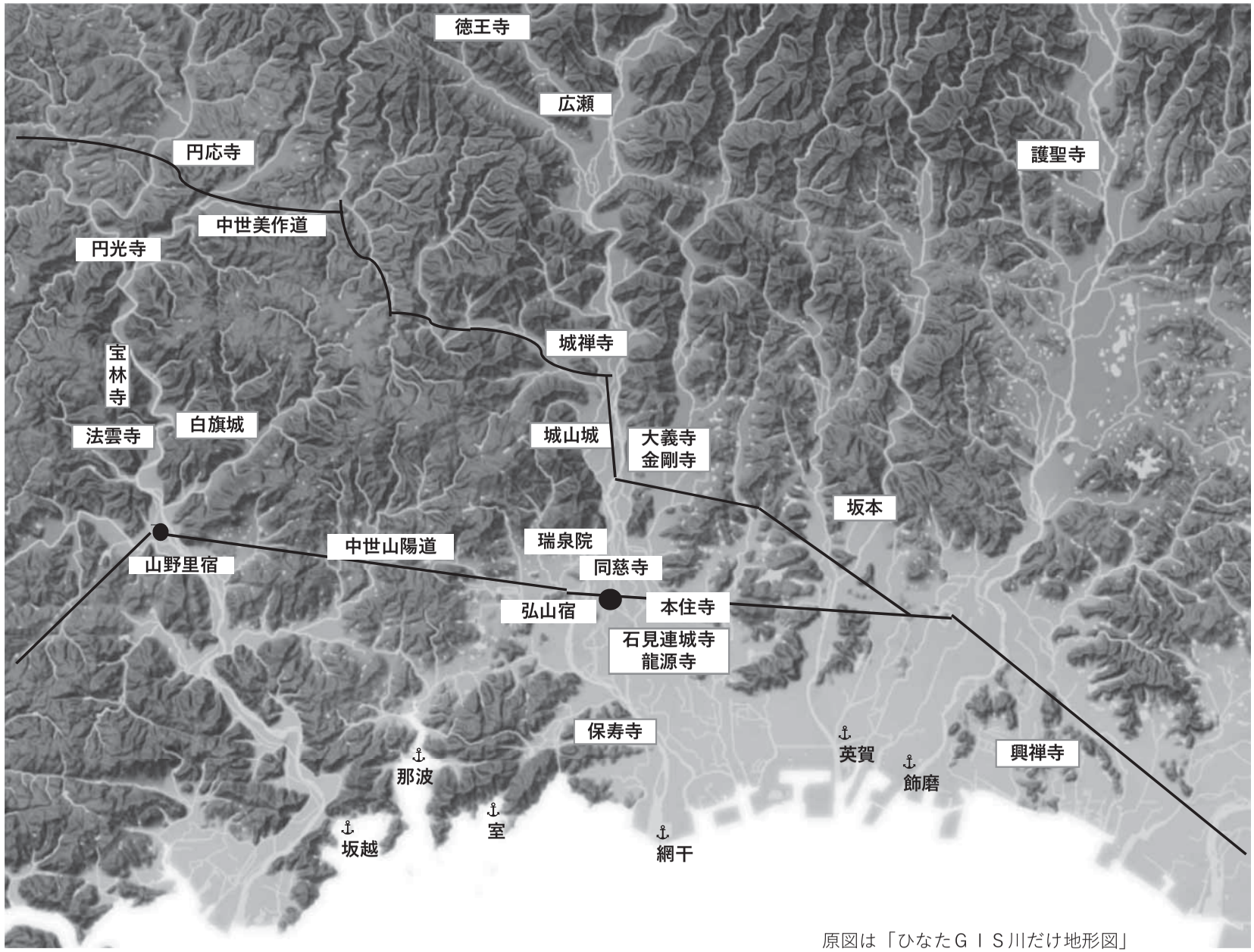
一山派法系図〈播磨関連〉

36	材用宗茂	一山派		14090359	曇仲没	曇仲遺藁（新1）
37	太白真玄	一山派	応永18	14110816	入寺	太白和尚語録（内閣）
38	範宗洪西堂		応永28	14210000	住	瑞渓疏（新5）
39	明叟彦洞	一山派	応永31	14240729	公帖	明叟洞禅師語録（内閣）
40	耕隠曽尹	仏光派		14290925		雲壑猿吟（全3）
41	心石□安	仏光派		14300700	住	瑞渓疏（新5）
42	卿先徳進	聖一派		14320817	疏	心田播禅師疏（新別1）
43	慶霖潤英		永享8	14360806	赤松阿波殿吹嘘	蔭涼軒日録
44	禎首座	一山派		14370420		惟肖疏藁（新2）
45	祖鳳西堂		永享10	14380812	赤松阿波守吹嘘	蔭涼軒日録
46	利睦西堂		永享12	14401209	吹嘘赤松阿波入道	蔭涼軒日録
47	金華故人			14410624		村庵小稿（続12下）
48	巌叟貲霖	黄龍派		14440000		村庵藁下（新2）
49	文用侍史			14460815		続翠詩集（続12上）
50	穆蒲庵			14470000	住	心田播禅師疏（新別1）
51	蒲心光睦	聖一派		14510000	住	越雪集（新別2）
52	南江宗沅	一山派		14550000	遊	漁庵小藁（新6）
53	宗恬西堂		長禄2	14580914		蔭涼軒日録
54	恬西堂		長禄3	14590928	還附之御礼	蔭涼軒日録
55	宝洲宗衆	一山派	長禄4	14600803	公文御判	蔭涼軒日録
56	節叟宗守	聖一派	寛正3	14621021	公文御判	蔭涼軒日録
57	正授西堂		寛正5	14641013	公文御判	蔭涼軒日録
58	善禅師		文明14	14820316		翠竹真如集1（新5）
59	正賝西堂		文明17	14851216		蔭涼軒日録
60	慈暘西堂		長享2	14880518		蔭涼軒日録
61	景徐周麟	夢窓派	明応丁巳	14970425	起播君赤松府之請	翰林葫蘆集（全4）
62	陽叔集雍	一山派	明応丁巳	14970425	主	翰林葫蘆集（全4）
63	松裔真龍	一山派	己未之秋	14990700	都下騒然	翰林葫蘆集（全4）
64	快心剱			15000923	住、俗姓浦上	黙雲集（新5）
65	拙叟	一山派		15000923		黙雲集（新5）
66	春荘宗椿	一山派	永正5	15080100		幻雲文集（続13下）
67	松裔仙伯	一山派		15219999		梅渓稿（続13下）

全は『五山文学全集』、新・新別は『五山文学新集』、全書は『大日本仏教全書』、続は『続群書類従』の巻数、大史は『大日本史料』の篇と巻数、内閣は国立公文書館デジタルアーカイブの略称（以下同じ）。

表１　法雲寺歴代

	人名	門流	元号年	西暦年	備考	出典1
1	雪村友梅	一山派	建武4	13370701	開山	雪村大和尚行道記（新3）
2	雪村友梅	一山派	暦応2	13391100	諸山	雪村大和尚行道記（新3）
3	琇上座		暦応4	13410801	遇賊身亡	宝覚真空禅師録（新3）
4	聞渓良聡	一山派	康永2	13430811		雪村大和尚行道記（新3）
5	無雲義天	楊岐派	貞和2	13460000		本朝高僧伝31（全書102）
6	月堂円心	楊岐派		13460000	辞参無雲于法雲	延宝伝燈録18（全書108）
7	良本	一山派	貞和3	13470100	永置于播之大龍也	雪村大和尚行道記（新3）
8	太清宗渭	一山派	貞和3	13470100	永置于播之大龍也	雪村大和尚行道記（新3）
9	良和	一山派	貞和3	13470100	永置于播之大龍也	雪村大和尚行道記（新3）
10	蘭洲良芳	一山派		13560000		延宝伝燈録22（全書108）
11	霊峯首座			13611211	疏	乾峰和尚語録二（新別1）
12	古源邵元	聖一派		13641111		東福廿五世古伝和尚伝（続9下）
13	春谷永蘭	楊岐派	貞治5	13660200		詩軸集成（新別1）
14	雲渓支山	一山派	応安1	13680000	冬住持	五山文編（大史6-30）
15	天山上人			13680000	帰金華	心華詩藁（新別2）
16	天境霊致	大鑑派	応安1	13680427	入寺	無規矩乾（新3）
17	大本良中	一山派		13681120		延宝伝燈録22（全書108）
18	雲渓支山	一山派	応安3	13700809		空華集（全2）
19	無格良標	一山派				延宝伝燈録22（全書108）
20	宗堂貲淵	黄龍派		13730809	師放牛光林没日	法観雑記（大史6-38）
21	寧侍者			13770112		若木集（全2）
22	竺堂円瞿	燄慧派		13781018	疏	乾峰和尚語録2（新別1）
23	汝霜良佐	一山派	康暦2	13800000		繋驢橛（新別2）
24	絶海中津	夢窓派	康暦2	13800000	赤松氏将幡法雲聘	仏智広照浄印翊聖国師年譜（続9下）
25	天錫貲疇	黄龍派	癸亥夏	13830400		東海璚華集2（新2）
26	惟肖得巌	燄慧派	癸亥夏	13830400		東海璚華集2（新2）
27	勉之肯旃	仏光派		13811118	山門疏	無規矩坤（新3）
28	嵩岳中			13880000	嘗住	汝霖佐禅師疏（新別2）
29	器之令簠	一山派		13981118		無規矩坤（新3）
30	古調省韶	松源派		13999999		了幻集（全3）
31	仲芳円伊	大覚派	応永9	14020824		仲方和尚語録（大史7-5）
32	仲芳円伊	大覚派	丙戌之春	14060100		懶室漫稿〈全3）
33	太白真玄	一山派	応永13	14060619	御教書	教言卿記
34	環中□連	一山派	応永14	14070406	拈香、本山前第一座	太白和尚語録（内閣）
35	太白真玄	一山派	応永15	14080526	入洛	教言卿記



原図は「ひなたＧＩＳ川だけ地形図」